



Title	フーコーの身体概念
Author(s)	藤田, 公二郎
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2017, 51, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71384
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フーコーの身体概念

藤田 公二郎

キーワード：ミシェル・フーコー／身体／権力／可変性／実体化

はじめに

本稿の目的は、ミシェル・フーコーの身体概念を明らかにすることである。この概念は、フーコーの思想においてきわめて重要な役割を演じており、またそのことも研究者の間で広く認識されているが、しかしそれにもかかわらず、実のところ、これまで必ずしも十分に明らかにされてこなかった。その概念はたしかに、フーコーの歴史研究との関連では少なからず検討されてきたが、彼の理論的考察との関連では十分に検討されてこなかったのである。

この点を確認するために、まずは問題の背景を概観しておこう。一般によく知られている通り、フーコーは身体をめぐって一連の歴史研究をおこなっている。彼は、身体が権力を通じて変容していくものであるとし、その歴史を記述しているのである。たとえば、中世においては「司牧権力」が展開し、それによって身体は、告白させられ解釈される「肉体」(chair)として形成される。近世においては「主権権力」が展開し、それによって身体は、命令され抑圧される「臣民」(sujet)において問題化される。近代においては「生権力」が展開し、それによって身体は、規律化され調整される「生命」(vie)として構成される。フーコーはこのように、身体がさまざまな権力を通じて肉体や臣民や生命などへと移行していくことを歴史的に明らかにしているのである。それゆえこれまでのフーコー研究はもっぱら、フーコーの歴史研究を注釈しつつ、そうした肉体や臣民や生命を仔細に検討してきた。たとえば、F・グロやG・ルブランの著作¹⁾などがその点について一定の成果を上げて

いると言えよう。しかしながら、先行研究のこうした根強い関心にもかかわらず、フーコーの身体概念それ自体は、実のところ、これまで十分に検討されてこなかったように思われる。つまり、身体は歴史的水準において肉体や臣民や生命などとして検討されてきたが、理論的水準においては十分に検討されてこなかったのである。²⁾ それゆえ今や、フーコーの身体概念をその理論的水準において明らかにしなくてはならない。

フーコーは、こうした身体概念について体系的な議論こそ展開していないが、しかし一連の断片的な考察を残している。それらの考察を通覧したときに気づかされるのは、フーコーの身体概念にはおそらく一つの転回が認められるということである。³⁾ 1960年代のフーコー、つまり前期フーコーは、H・ドレイファスとP・ラビノウが指摘しているように、⁴⁾ 現象学を批判しつつもいまだ現象学の概念系に依拠し続けている。そのためこの時期の身体概念もまた、現象学の影響下に、とりわけメルロ＝ポンティの影響下に置かれているように思われる。⁵⁾ しかし、1970年代以降のフーコー、つまり後期フーコーは、現象学の概念系を根本的に放棄し、新たにニーチェの系譜学の概念系に依拠している。このとき彼の身体概念もまた、その系譜学の影響下でおおよそ一新されているように思われる。この新たな概念は結局のところ、当の系譜学それ自体と一緒に、フーコーの晩年まで基本的に維持されることになると言えるだろう。つまりここには、前期フーコーの現象学的な身体概念から後期フーコーの系譜学的な身体概念への転回が存在しているのである。フーコーの思想にとっていっそう核心的なものは、言うまでもなく後者の身体概念である。実際フーコーは、それに依拠することではじめて上述の一連の歴史研究を実現している。それゆえここでは、その系譜学的な身体概念を明らかにしなくてはならない。

以上より本稿は、フーコーの身体概念をその理論的水準において、またニーチェの系譜学との関連において明らかにしていく。

1. 生命科学から権力へ

フーコーの「身体」(corps) 概念とはいかなるものか。それは、私たちが普段理解しているような身体とは根本的に異なっている。私たちが普段理解しているような身体とは一般に、科学によって説明された身体であるだろう。科学とは、言うまでもなく、生理学や病理学などの生命科学である。生命科学は、身体を有機的な身体として把握し、その客観的認識を絶えず私たちに提供してきた。たとえば医者は、こうした客観的認識に基づいて患者に疾病治療の知識を教えてきた。あるいはまた行政は、こうした客観的認識に基づいて住民に公衆衛生の知識を報じてきた。私たちはこうした知識を経由することで、自己や他者の身体を了解したり、実際にそれらに働きかけたりしてきたのである。

しかし、フーコーによれば、こうした生命科学は実のところ、けっして厳密な意味での客観的認識ではない⁶⁾。なぜならこの科学においては、たんに生命についての事実認識が問題になっているだけでなく、その価値判断もまた問題となっているからである。それはつまり、所与の生命が正常に機能しているか否かという価値判断である。すなわち、正常と病理に関する「規範」(norme) が問題となっているのである。ところで、フーコーによれば、この規範はけっして自然的に与えられるものではない。彼は、カンギレムの生命科学論を参考しながら、次のように述べている⁷⁾。すなわち、「規範は自然法則としてはまったく定義されず、自らの適用領域に対する行使可能な要請や強制の役割によって定義されます」と。「規範とはしたがって一つの権力要求をもたらすものです」と。規範とはつまり、自然法則として普遍的に存在するものではなく、権力行使として歴史的に出現するものなのである。それゆえ生命科学は、この規範において権力と関係しながら、所与の生命が正常か否かを判断していると言える。そういうわけで生命科学はもはや、厳密な意味での客観的認識ではないのである。

もっとも、フーコーは最終的にこうしたことを、生命科学という一個別科学についてだけでなく、科学一般についても主張するようになるだろう。といふのも、彼によれば、諸科学は実のところ、ひとえに科学者の合理的な思考によって生み出されるというよりも、むしろ彼らの非合理的な欲求、攻撃的な欲求に支えられることによってはじめて作り出されるからである。それはつまり、「本能、情念、執拗な詮索、残酷な洗練、悪意」などのことであり、要するにフーコーが「知への意志」(volonté de savoir)と呼んでいるもののことにはかならない⁸⁾。言うまでもなくこの概念は、ニーチェの概念、すなわち「力への意志」(Wille zur Macht, volonté de puissance)に由来している。まさしくここにおいて権力が問題となるのである。諸科学は実のところ理性に基づいているのではなく、権力に条件付けられているのである。

こういうわけでフーコーはもはや、生命科学が提出する身体概念に満足しない。彼はむしろ、その生命科学を根底から支えている権力に注目する。そうすることで、生命科学によって把握される以前の身体、すなわち私たちの現実的な身体を問題にしようと試みるのである。したがって次は、生命科学の通念から抜け出して、権力の深みへと下っていかなくてはならない。

2. 権力

フーコーは自らの権力観に関して体系的な理論を提出していない。だが彼は、それに関する一連の断片的な考察を残しており、またいくつかのニーチェ論も執筆している。したがって以下では、それらを手がかりにすることにより、フーコーの権力観の理論的な骨格を素描してみたい⁹⁾。

フーコーの権力観において「権力」(pouvoir)は、私たちが通常考えているような権力、つまり主権者の法的権利のようなものではない。それは、フーコーによれば、法的権利云々以前にある力と力の現実のぶつかりあいであり、ある力から別の力への実際の関係であり、要するに「力関係」(rapport de force)¹⁰⁾である。ところで、この力関係については、そこからさらに力だけ

を取り出してその本質を分析することはできない。なぜならこの力はもはや実体のようなものではなく、実のところそれ自体においていかなる本質も有していないからである。それは、ほかの力との関係からしか自らの諸規定を与えるのである。実際フーコーは次のように述べている。「[...] 関係に先立っており、どこかに位置づけることができるようなそうした諸要素から出発するよりも、むしろ権力関係そのものから出発することが、つまりその事実的で実際的なものとしての支配関係から出発することが重要です。そしてまさにこの関係それ自体が、自らの諸要素をいかに規定しているかを見ることが重要です」¹¹⁾つまり、諸要素が関係を規定しているのではなく、関係が諸要素を規定しているのである。それゆえたんに個々の力だけが問題であるというよりは、むしろ力関係が問題なのであり、それこそがまさしく権力なのである。

したがってこうした力関係としての権力は、もはや法的権利のように特定人物の内に局在せず、世界のいたるところに遍在している。それはつまり、特権者が一定期間保持する「(権力)」(Pouvoir)ではなく、万人がつねに巻き込まれている「ミクロ権力」(micropouvoirs)なのである。¹²⁾こうしたもろもろの権力は、第一に、純粹な「出来事」(événement)として生じる。¹³⁾それらは、神によって背後から決定されることも、理性によって高みから規制するされることもなく、力と力の間の無媒介的な接触なのである。第二にそれらの権力は、永遠の「闘争」(lutte)状態に置かれている。¹⁴⁾それらは、神との契約を通じて恒久的な平和に導かれることも、社会契約によって決定的な和解に換えられることもなく、力と力の間の際限なき戦争なのである。第三にそれらの権力は、「知」(savoir)によって一時的に安定化することができる。¹⁵⁾それらは、たんなる出来事としてはかなく消え去るだけでもなく、たんなる闘争としてむなしく移ろいゆくだけでもなく、力と力の間の言説的なコード化なのである。このように世界には無数の権力が存在しており、それらは出来事として発生し、闘争の中で変化し、知の下で存続する。こうした諸権力の生成こそが、まさしく権力の歴史にほかならない。それはもはや、

神の摂理によって決定論的に展開することも、理性の自由によって目的論的に発展することもなく、諸権力の「賽子遊び的な」(aléatoire) 運命なのである。¹⁶⁾

以上が、フーコーの権力観の理論的骨格である。したがって次は、この権力観において身体概念それ自体を検討しなくてはならない。

3. 身体

フーコーは身体概念を明確に定義していないが、しかし彼の権力観の中でたびたび問題にしている。それらの個所を仔細に検討したとき、身体概念がその権力観の中で一定の重要な位置を占めているように思われる。以下ではその位置を示しつつ、身体概念の内実を分析していきたい。

すでに見たように、フーコーの権力観において権力とは力関係であり、ある力から別の力への関係のことである。ここには二つの力、すなわち関係づける力と関係づけられる力が存在している。まずは、関係づける力を見てみよう。この力は、権力を行使する仕方のことであり、要するに権力の扱い手である。この扱い手をしかるべき問題にするために、フーコーはさまざまな用語を使ってそれを言い表そうとしているが、なかでもとくに練り上げられた用語は、おそらく「統治」(gouvernement) であるだろう。M・スネラールが述べるように、¹⁷⁾ この語は当初、フーコーの歴史研究、とりわけ統治性論や生権力論の中で研究対象として論じられたが、やがて彼自身の哲学の一般概念として理論的に練り上げられていった。統治はこうして、その語が今日持っている政治的な意味よりもいっそう広い意味を与えられることになる。¹⁸⁾ それはつまり、たんに政治的な力関係においてある力が別の力を導く仕方を意味するだけではなく、ありとあらゆる力関係においてある力が別の力を導く仕方を意味しているのである。こうした統治こそが、一つ目の力にはかならない。それでは次に、関係づけられる力の方を見てみよう。この力は、権力が行使される素材のことであり、要するに権力の標的である。この標的を

問題にするにあたっても、フーコーは複数の用語を使ってそれを言い表そうとしているが、なかでもある一つの用語が概念的な一般性を十分に獲得していたように思われる。それこそが実のところ、「身体」にはほかならない。この語はたしかに、フーコーの歴史研究、とりわけ規律権力論の中で大きく問題になったが、しかし実際には、彼の一連の権力論を通じて、顕在的にであれ潜在的にであれ、理論的に前提され続けていたように思われる。フーコーは述べている、「いかなる権力においても本質的なことは、その適用点がつねに最終的には身体である」¹⁹⁾と。こうした身体こそが、二つ目の力にはかならない。そういうわけで身体は、フーコーの権力観において一つの重要な位置を占めていると言える。権力とはすなわち、ある力から別の力への関係、つまり統治から身体への関係のことだと言えるのである。²⁰⁾

それゆえ身体とは関係づけられる力のことである。ところで、世界にはつねに一方に関係づける力があり、他方に関係づけられる力があるわけではない。全ての力が、あるときは関係づける力となり、またあるときは関係づけられる力となるのである。したがって、その意味で身体は、力が世界に遍在している以上、おのれ自身も世界に遍在していると言える。この身体はもはや、生命科学が把握する身体でないだけでなく、そもそも人間の身体でさえないだろう。それは、人間のみならずあらゆる動物や植物や鉱物を貫いて存在しているのである。実際フーコーは、ニーチェの系譜学を参照しながら、身体が人間の一個体を時間的にも空間的にも大きく越えていくものであると述べている。それによれば、身体は一方で、一つの個体を越えてその「祖先」²¹⁾まで無限に及んでいく存在である。身体は結局のところ、個体の連鎖を通じて過去から未来へ時間全体を覆っているのである。他方で身体は、一つの個体を越えてそれを支える環境全体、つまり「身体と関わるすべてのもの、食物、気候、土地」²²⁾にまで無限に及んでいく存在である。身体は結局のところ、個体の環境を通じて空間全体を覆っているのである。こうして身体は最終的に世界全体、歴史全体を覆うことになる。フーコーは、身体を最大限拡張させて次のように述べている。「歴史とは、その充実、衰退、

密かな発作、発熱を伴う大きな動搖、失神とともに、生成の身体そのものである」と。²³⁾身体とはつまり、権力の歴史全体に広がっている物質的諸要素の総体なのである。このように身体とは、関係づけられる力一般を意味しているのであり、その限りで物質的諸要素の総体を指し示しているのである。

こうした身体は、上述したような力である以上、おのれ自体においていかなる本質も有していないが、しかしそのいかなる本質も有していないということそれ自体は、一つの注目すべき外的特徴として記しておくことができるようと思われる。つまり身体は、その限りにおいて、「可変性」(variabilité)という特徴を有していると言えるのである。実際、すでに見たように、身体とは関係づけられる力であり、この力はおのれ自体においていかなる本質も持たない。それは代わりに、ほかのさまざまな力との関係においてさまざまな偶有的性質を受け取り続ける。そうしてその力、その身体はさまざまに変容していくのである。こうした身体の可変性について、フーコーは、ニーチェの系譜学を参照しつつ、次のように明確に説明している。

私たちはいずれにしても、身体だけはその生理学的法則以外の法則をもっておらず、歴史から逃れていると考えている。これもまた間違いである。身体は、おのれを加工する一連の体制の中に捉えられている。それは、労働と休息と祝祭のリズムに慣らされている。それは、もろもろの毒物——食物や諸価値、つまり食習慣と道徳法則これら全体——によって中毒している。それは自分のためにもろもろの抵抗を打ち立てる。[...] 人間においては何物も——その身体でさえも——十分に固定していないのである。²⁴⁾

私たちは普段、生命科学を信じて、身体が超歴史的な自然法則、つまり生理学的法則に従っているとみなしている。そうしてまた、身体が不变的な実体であるとみなしている。しかし実際のところ身体は、歴史の中でさまざまな権力システムに晒されており、そこでさまざまな偶有的性質を受け取り続け

ている。つまり身体はもはや、自然法則に従属し生物学的領野に投げ込まれている実体ではない。それはいまや、権力関係に従属し政治的領野に投げ込まれている物質である。フーコーは述べている。すなわち、「身体は〔…〕直接的に政治的領野に投げ込まれている。もろもろの権力関係は身体に対して無媒介的な把握をおこなう。それらは身体を攻囲し、それに烙印を押し、それを訓練し、それを責めさいなみ、それを仕事に縛り付け、それに儀式を強制し、それにもろもろの証を求める」²⁵⁾ 身体はこのように権力を通じてさまざまに働きかけられ、おのれの偶有的性質を更新し続けるのである。そういうわけで身体は、重要な特徴として可変性を有していると言えるのである。

したがってこうした身体はおそらく、ジョルジオ・アガンベンがフーコー やヴァルター・ベンヤミンを解釈しつつ述べているような「剥き出しの生」(vie nue) ではあり得ないだろう。²⁶⁾ アガンベンは、近代世界において私たちの生そのものが全面的に政治化し、主権権力の対象になったと指摘しており、それを剥き出しの生と呼んでいる。この生とはつまり、何物にも覆われていないような丸裸の身体、生物的で自然的な身体、いわば原初的な身体のことであるだろう。しかし、すでに見たように、身体とはそもそも可変的なものであり、いかなる本質も持たないものであって、それゆえそこには最初から、剥き出され得るような何か、原初的な何かも存在しない。身体とはつねに必ず、何らかの権力関係によって歴史的に規定され、生産されたものなのである。換言すれば、生とはけっして剥き出さず、つねに加工されたものなのである。したがって、おそらく主張されるべきだったのは、今日私たちの身体が「剥き出しの生」という衣装の下で歴史的に鑄直されているという事態であっただろう。

以上より、身体とは関係づけられる力であり、その特徴として可変性を有していることが示された。ところで、この可変的な身体には、フーコーによって明確に指摘されていないものの、一つの逆説的な事態が生じ得るように思われる。最後にこの点について若干の考察をおこなっておきたい。

4. 権力から生命科学へ

可変的な身体の逆説的な事態とは、すなわち「実体化」(substantialisation)である。繰り返し見たように、身体は通常さまざまな権力関係を通じて変容し続けている。だがその権力関係が安定化したとき、身体もまた固定化してしまう。そのためひとはこの身体を見てその根底に実体を想定し、身体の偶有的性質を本質と取り違えてしまうことになる。つまり身体は、もはや可変的な素材ではなく不变的な実体として理解されてしまうのである。これがまさしく実体化である。実際、生命科学もまた、このような実体化を身体に対しておこなってきたように思われる。それゆえ今や、権力の深みから引き返して、再び生命科学の現実へと上っていかねばならない。

一般に生命科学は、自然的に与えられた身体を問題にしてきたと考えられている。だが実際のところこの科学は、権力関係によって固定化した身体を問題にしてきたにほかならない。生命科学はそうすることで身体の根底に実体を想定し、その偶有的性質を本質として取り違えてきた。つまり身体は、もはや可変的な素材ではなく不变的な実体として、すなわち「有機的な身体」として理解されてしまったのである。生命科学はそうして身体を実体化したのである。しかしながらこの実体化は、生命科学のたんなる事実誤認ではすまされないだろう。なぜなら生命科学は、この実体化によって身体を現在の状態にいっそう押しとどめてしまうからである。つまり生命科学は、実体化によって身体の「客観的認識」を産出し、それを身体に押しつけてしまうのである。たとえば行政は、その「客観的認識」に基づいて住民に公衆衛生の知識を報じる。あるいはまた医者は、その「客観的認識」に基づいて患者個人に疾病治療の知識を教える。私たちはこうした知識を経由することで、自己や他者の身体を了解したり、実際にそれらに働きかけたりする。身体はこうして「客観的認識」を押しつけられ、それに閉じ込められてしまうのである。

たとえば、「性的なもの〔セクシュアリティ〕」(sexualité)について、とりわけ性欲について考えてみよう。生命科学は一般に、性欲が、自然的に与

えられた本能であり、それゆえ正常と病理の自然的な規範に関わっているとみなしてきた。その規範によれば、性欲は、生命の自己保存に適う場合には正常であるが、そうでない場合は病理的であるとされてきた。つまり生殖目的の性欲は正常であるが、同性愛やサドマゾヒズムやフェティシズムなどの性欲は病理的なのである。しかし、フーコーによれば、性欲は実のところ、歴史的に発明されたものにすぎない。²⁷⁾性欲とはつまり、一九世紀初頭に西欧で生命科学が誕生した際、人々の身体の一部が実体化されたものなのである。ところで、病院や行政は、こうした性欲の「客観的認識」を世間に浸透させた。人々はそれを経由することで、自己や他者の身体を了解したり、実際にそれらに働きかけたりするようになった。その結果、性欲は、歴史的に発明されたものであるにもかかわらず、あたかも本当に自然的に与えられたものであるかのように存在しはじめたのである。正常な性欲も病理的な性欲も、純愛も倒錯も、政治的に分割されたものであるにもかかわらず、あたかも本当に本性的に分岐したものであるかのように存在しはじめたのである。

このように生命科学は、実体化によって身体を現在の状態に押しとどめ、そうすることで身体を取り扱いやすいものにする。しかし、事態は実のところ、これだけでは終わらないだろう。身体が実体化され、取り扱いやすいものになった結果、当の権力関係はいっそう安定化することになる。それによって身体はいっそう固定化され、いっそう取り扱いやすいものになる。その結果、当の生命科学はいっそう精密化することになる。それによって身体はいっそう実体化され、いっそう取り扱いやすいものになる。その結果、さらにまた権力関係はいっそう安定化していくことになる。こうした生命科学と権力関係の相互的な強化には終わりがないだろう。つまりここには、身体の再生産のサイクルが存在しているのである。²⁸⁾この自給自足的なサイクルにとどまっている限り、身体に関する生命科学はつねに真理であり、身体に対する権力関係はつねに正当であるだろう。なぜなら、その生命科学が真理であるように、権力関係がつねに予め身体を形成しているからであり、また反対にその権力関係が正当であるように、生命科学がつねに予め身体を形成してい

るからである。つまり生命科学と権力関係は、おのれが真理であり正当であるように、おのれ自身によって身体をつねに予め形成しているので、当然ながらつねに真理であり正当なのである。これはすなわち、生命科学と権力関係の、理論と実践の、したがって精神と物質の共犯的な二元論である。

こうした身体の再生産のサイクルとは結局、フーコーが「生権力」(bio-pouvoir) の名において批判したものと別のものではないだろう。²⁹⁾ 実際そこでは、生権力の二つの機能とみなされていたもの、すなわち「解剖政治」(anatomo-politique) と「生政治」(bio-politique) が作用していると言えるだろう。これらはつまり、病院と行政の二頭政治とでも形容し得るものである。病院は解剖政治として個人の身体を規律化し、行政は生政治として住民の身体を調整する。この個人の身体と人口の身体の結節点にあるものこそが、実のところ性に関する一切であり、とりわけ性欲にほかならない。この共通の操作対象を媒介にすることで、解剖政治と生政治は、個人の身体と人口の身体を一つの性的な身体として連結させるのである。かくして生権力は、人々の身体を一つの有機的な身体として、つまり「生命」として形成するに至るだろう。まさしくこの生命こそ、生命科学が自らに固有な研究対象としてきたものにほかならない。今日私たちは依然として、こうした生権力のメカニズム、あるいは身体の再生産のサイクルの中で身動きがとれないでいるのかもしれない。

おわりに

以上より、フーコーの身体概念をその理論的水準において、またニーチェの系譜学との関連において明らかにすることことができた。その概念は、生命科学の身体概念とは根本的に異なっており、権力の次元に定位していた。フーコーの権力観によれば、権力とは力関係であり、ある力から別の力への関係のことであった。身体とはまさしくこの後者の力、つまり関係づけられる力であり、その特徴として可変性を有していたのである。

こうした私たちの現実的な身体は、実際のところ、生命科学のみならず伝

統的な哲学によっても長らく覆い隠されてきたと言えるだろう。伝統的な哲学は、これまで繰り返し身体を問題にしてきたが、そうした身体は概して、私たちの現実的な身体というよりはむしろ、精神によって把握された身体、あるいは意識によって構成された身体にすぎなかっただろう。こうした構成的な身体の背後にあって、私たちの現実的な身体は葬り去られてきたのである。したがって私たちは今や、その現実的な身体を問題にしなくてはならない。だがそれはもはや、メルロ＝ポンティの現象学のように、根源的な身体を解釈することではない。というのも現実的な身体は可変的であって、そもそもいかなる根源的な存在様態も有していないからである。むしろなされるべきは、今日私たちが現実において「耐え難い」(intolérable)³⁰⁾と感じているような身体、その重苦しい身体を変容させることである。というのも現実的な身体は、可変的である以上、もっと快活な身体、「悦ばしき」(gai) 身体にもなり得るからである。哲学者たちはこれまで身体をさまざまに解釈してきた。しかし重要なのは身体を変容させることである。

[注]

- 1) F. Gros, *Michel Foucault*, PUF, 1996 [F・グロ『ミシェル・フーコー』、露崎俊和訳、白水社、一九九八年]; G. le Blanc, *La pensée Foucault*, ellipses, 2006.
- 2) その数少ない例外として、近年出版されたA・スフォルジーニの仕事を挙げることができるだろう。もっとも、そこで彼女は、フーコーが当初からすでにメルロ＝ポンティの現象学的な身体観を完全に乗り越えていたと考えており、これは、後述するように、本稿の理解とは大きく異なっている。Cf. A. Sforzini, *Michel Foucault. Une pensée du corps*, PUF, 2014.
- 3) この転回について筆者は以前、博士論文の中で詳しく論じたことがある (*Pour une philosophie de la subjectivation. Etude sur Michel Foucault*, Thèse de Doctorat à l'Université Paris-Est, 2015)
- 4) H. Dreyfus & P. Rabinow, *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, The University of Chicago Press, 1983, p. 44-52 [H・ドレイフェス／P・ラビノウ『ミシェル・フーコー——構造主義と解釈学を超えて』、山形頼洋ほか訳、筑

- 摩書房、一九九六年、七九～八八頁]。
- 5) この点は、M・ポット＝ボヌヴィルも指摘しているように、とりわけ1966年のラジオ講演「ユートピア的身体」において認めることができるだろう。Foucault, « Le corps utopique », in *Le corps utopique, Les hétérotopies*, Lignes, 2009 [フーコー「ユートピア的身体」、『ユートピア的身体／ヘテロトピア』所収、佐藤嘉幸訳、水声社、二〇一三年] ; M. Potte-Bonneville, « Les corps de Michel Foucault », in *Cahiers philosophiques*, n° 130, 2012, p. 78.
 - 6) Cf. Foucault, « Introduction par Michel Foucault », in *Dits et écrits III*, Gallimard, 1994, p. 437-442 [フーコー「フーコーによる序文」、廣瀬浩司訳、『ミシェル・フーコー思考集成VII』所収、筑摩書房、二〇〇〇年、一三～一九頁] ; Foucault, « La vie : l'expérience et la science », in *Dits et écrits IV*, Gallimard, 1994, p. 772-776 [フーコー「生命——経験と科学」、廣瀬浩司訳、『ミシェル・フーコー思考集成X』所収、筑摩書房、二〇〇二年、三〇〇～三〇五頁]
 - 7) Foucault, *Les anormaux*, Gallimard/Seuil, 1999, p. 46 [フーコー『異常者たち』、慎改康之訳、筑摩書房、二〇〇二年、五四頁] ; cf. Canguilhem, *Le normal et le pathologique*, PUF, 1966, p. 155-157, 175-180, 192-206 [カンギレム『正常と病理』、滝沢武久訳、法政大学出版、一九八七年、二〇九～二一二、二一九～二二六、二四一～二五八頁]
 - 8) Foucault, « Nietzsche, la généalogie, l'histoire », in *Dits et écrits II*, Gallimard, 1994, p. 155 [フーコー「ニーチェ、系譜学、歴史」、伊藤晃訳、『ミシェル・フーコー思考集成IV』所収、筑摩書房、一九九九年、三六頁]
 - 9) 筆者は別の論文で、フーコーの権力観を理論的に分析したことがある（『権力の系譜学』のために、日本哲学会編『哲學』所収、六五号、二〇一四年）。またさらに別の論文では、フーコーのニーチェ読解を理論的に再構成したことがある（“Force and Knowledge: Foucault's Reading of Nietzsche”, in *Foucault Studies*, No. 16, 2013）。なお、筆者はこれらの仕事を最終的に前掲の博士論文の内にまとめなおしている。本節は、これら一連の成果に基づいている。
 - 10) Foucault, « Il faut défendre la société », Gallimard/Seuil, 1997, p. 15 [フーコー『社会は防衛しなければならない』、石田英敬・小野正継訳、筑摩書房、二〇〇七年、一八頁]
 - 11) Ibid., p. 38 [四七頁]
 - 12) Cf. Foucault, *Histoire de la sexualité I. La volonté de savoir*, Gallimard, 1976, p. 121 [フーコー『性の歴史I——知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、一九八六年、一一九頁] ; Foucault, *Surveiller et punir. Naissance de la prison*, Gallimard, 1975, p. 32 [フーコー『監獄の誕生——監視と処罰』、田村俊訳、新潮社、一九七七年、

三一頁]

- 13) Cf. Foucault, « Nietzsche, la généalogie, l'histoire », p. 148-149 [二七～二八頁]
- 14) Cf. ibid., p. 144-145 [二三～二四頁]
- 15) Cf. ibid. ; Foucault, *Histoire de la sexualité I. La volonté de savoir*, p. 132-135 [一二九～一三一頁]
- 16) Cf. Foucault, « Nietzsche, la généalogie, l'histoire », p. 148-149 [二七～二八頁]
- 17) Cf. M. Senellart, « Situation des cours », in Foucault, *Sécurité, territoire, population*, Gallimard/Seuil, 2004, p. 403-408 [M・スネラール「講義の位置づけ」、フーコー『安全、領土、人口』所収、高桑和巳訳、筑摩書房、二〇〇七年、四七二～四七六頁]
- 18) Cf. Foucault, « Le sujet et le pouvoir », in *Dits et écrits IV*, p. 235-238 [フーコー「主体と権力」、渥海和久訳、『ミシェル・フーコー思考集成 IX』所収、筑摩書房、二〇〇一年、二四～二六頁]
- 19) Foucault, *Le pouvoir psychiatrique*, Gallimard/Seuil, 2003, p. 15 [フーコー『精神医学の権力』、慎改康之訳、筑摩書房、二〇〇六年、一八頁]
- 20) ここでは、ある力から別の力への関係、つまり自己から他者への関係が問題となっており、それゆえ身体は他者の身体として論じられているが、しかし、晩年のフーコーの倫理思想に見られるように、この議論を、ある力からその力自身への関係、つまり自己から自己自身への関係に敷衍することもできるだろう。その場合、身体は自己自身の身体として論じられることになるだろう。
- 21) Foucault, « Nietzsche, la généalogie, l'histoire », p. 142 [二〇頁]
- 22) Ibid., p. 142-143 [二〇頁]
- 23) Ibid., p. 140 [一七頁]
- 24) Ibid., p. 147 [二六頁]
- 25) Foucault, *Surveiller et punir. Naissance de la prison*, p. 30 [三〇頁]
- 26) Cf. G. Agamben, *Homo sacer I. Le pouvoir souverain et la vie nue*, trad. M. Raiola, Seuil, 1997 [G・アガンベン『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』、高桑和巳訳、以文社、二〇〇三年]
- 27) Cf. Foucault, *Histoire de la sexualité I. La volonté de savoir*, p. 90-92, 136-173 [八八～九〇、一三三～一六七頁]
- 28) 権力と知のこうしたサイクルについては、たとえば以下を参照のこと。Cf. Foucault, *Surveiller et punir. Naissance de la prison*, p. 157, 225-226 [一五八～一五九、二二四頁] ; Foucault, *Histoire de la sexualité I. La volonté de savoir*, p. 129-130 [一二六～一二七頁]
- 29) Cf. ibid., p. 177-198 [一七一～一八九頁]
- 30) フーコーはかつて、権力システムへの抵抗の理由を、正義の観念にではなく、

「耐え難さ」に求めていた。というのも、正義の観念はそれ自体、抵抗すべき権力システムの一部をなしている恐れがあると考えられたからである。そういうわけで実際にフーコーは、自らの抵抗運動、監獄情報グループを組織した際、「耐え難さの調査」という活動を開始し、その成果を「〈耐え難いもの〉叢書」として刊行している。Cf. D. Defert, « Chronologie », in *Dits et écrits I*, Gallimard, 1994, p. 37-38 [D・ドゥフェール「年譜」、石田英敬訳、『ミシェル・フーコー思考集成I』所収、筑摩書房、一九九八年、三六~三七頁]

(文学研究科助教)

RESUME

Le concept de corps chez Foucault

Kojiro FUJITA

L'objectif de cet article est de mettre théoriquement en lumière le concept de corps chez Michel Foucault. Nous avons d'abord constaté que ce concept foucaldien est radicalement différent de celui de corps dans les sciences de la vie, en passant par sa lecture de Georges Canguilhem. Celle-ci nous a conduits à comprendre le corps non pas dans l'objectivité scientifique mais dans le jeu du pouvoir. Nous avons donc ensuite examiné la conception foucaldienne du pouvoir, influencée fortement par la pensée de Nietzsche, surtout son concept « volonté de puissance ». D'après cette conception foucaldienne, le pouvoir n'est plus apparu comme un « droit » traditionnel, mais comme un « rapport de force » : il s'agit d'un fonctionnement effectif qu'une force apporte à une autre. Ainsi, nous avons enfin analysé quelle place le corps peut occuper dans ce rapport d'une force à une autre. Cette analyse a finalement mis en lumière que le corps est ce qui correspond à la dernière force, la force rapportée. Elle en a mis en évidence aussi un caractère important : la variabilité. C'est-à-dire que le corps continue à être transformé historiquement à travers divers rapports de force. Cependant, ce corps variable peut être paradoxalement substantialisé, par exemple comme la « vie organique » par les sciences de la vie.